研究・調査報告書

分類番号		報告書番号	担当
A-169		21-418	手稲渓仁会病院　白坂知彦 独立行政法人国立病院機久里浜医療センター　松下幸生

題名（原題／訳）

Subjective Responses to Alcohol in the Development and Maintenance of Alcohol Use Disorder

アルコール使用障害の発症と維持におけるアルコールに対する主観的反応

執筆者

King A, Vena A, Hasin DS, deWit H, O'Connor SJ, Cao D.

掲載誌

Am J Psychiatry. 2021 Jun;178(6):560-571. doi: 10.1176/appi.ajp.2020.20030247. Epub 2021 Jan 5.

キーワード	PMID
アルコール反応、アロスタシス、インセンティブ-感作、報酬、刺激	33397141

要　旨

目的

アルコール使用障害（AUD）は、依然として緊急の公衆衛生問題である。過剰飲酒やAUDの発症・維持におけるアルコールに対する急性の主観的反応の役割を明らかにするために、縦断的なデータが必要である。著者らは，Chicago Social Drinking Projectにおける10年間の急性アルコール反応の繰り返し調査について報告する。

方法

若年成人の飲酒者（N=190）が最初のアルコールチャレンジ（プラセボと比較して0.8g/kgのアルコール）に参加し、5年後と10年後に繰り返された。また、飲酒行動とAUD症状についても、10年間にわたり多くの間隔で評価された。185人中184人（99%）が10年間の追跡調査を完了し、アルコール摂取の対象者の91%（179人中163人）がこの期間中に繰り返し検査に参加するなど、高い継続率が得られた。

結果

10年後の時点で、参加者の21%が過去1年間のAUDの基準を満たした。最初のアルコールチャレンジで最も大きなアルコール刺激、嗜好、欲求を報告した人は、10年後にAUDを発症している可能性が最も高かった。さらに、アルコールによる刺激と欲求は、10年が経過するにつれて、AUD症状の最も高い人たちの間で再検査において増加した。

結論

アルコールの初期刺激作用と報酬作用はアルコールの大量使用を予測し、これらの肯定的な主観的作用の大きさは、AUDを発症した人では発症しなかった人に比べて10年以上にわたって増加した。この結果は、アルコールに対する主観的反応の経時的変化を示すものであり、予防、早期介入、治療戦略への経験的根拠を提供するものである。